

森山古墳
両宮山古墳

2004

岡山県山陽町教育委員会

山陽町文化財調査報告 第2集

森山古墳

両宮山古墳

平成16年3月24日 印刷

平成16年3月31日 発行

編集・発行 岡山県山陽町教育委員会
岡山県赤磐郡山陽町下市337

印刷 株式会社 山陽プラン
岡山県赤磐郡山陽町上仁保45-1

森山古墳
両宮山古墳

2004

岡山県山陽町教育委員会



両宮山古墳と森山古墳



両宮山古墳

序

岡山県の南東部に所在する山陽町は豊かな自然に恵まれた町であり、桃をはじめとする農産物の産地として、また、岡山市近郊のベッドタウンとして発展しています。

そして数多くの文化遺産を擁することも、山陽町の大きな特徴です。

古代山陽道に面し赤坂郡の中心であったこの地には、多様な遺跡・古墳が残されています。それらのうち南方前池遺跡、また山陽団地造成に伴う用木・岩田古墳群、用木山遺跡などの発掘調査成果は、岡山県のみならず日本考古学において重要な資料として活用されていることは言うまでもありません。また、町内の遺跡を代表するものとして国史跡・両宮山古墳と同・備前國分寺跡があります。備前國分寺跡については整備にむけた調査に着手したところでありますし、両宮山古墳については外濠を伴うことが判明し人々の耳目を驚かせたのも記憶に新しいところです。

本書には両宮山古墳の前面に所在する県下最大の帆立貝形古墳・森山古墳の調査報告と両宮山古墳の墳丘測量調査の成果を所収しました。

前者は昭和49年と調査年度は古くはありますが、卓越した調査によってきわめて重要な成果が得られており、後者とともに両宮山古墳群研究の基礎的な資料となると言つてよいでしょう。遺跡の保存と開発との調整が今以上に困難であった時期の資料の重さを思い、それを今後に生かしたいと考えます。

最後になりましたが、森山古墳の調査にあたられた神原英朗氏、調査に關係された多くの方々、また、両宮山古墳の測量にご協力いただいた地元の皆様、多々ご教示をいただいている第二次山陽町遺跡整備委員会の先生方に、厚くお礼を申し上げます。

平成16年3月

山陽町教育委員会

教育長 渡辺 勝也

例　　言

- 1 本書は山陽町教育委員会が実施した森山古墳の確認調査、両宮山古墳墳丘の測量調査の報告書である。
- 2 森山古墳は岡山県赤磐郡山陽町穂崎 832 ほか、両宮山古墳は同 790 ほかに所在する。森山古墳は西もり山と呼ばれることも多いが、ここでは森山古墳の名称を用いる。
- 3 森山古墳の調査は昭和 49 年 8 月 24 日から 29 日まで、両宮山古墳の調査は平成 15 年 4 月 11 日から 6 月 2 日まで実施した。
- 4 森山古墳の調査は神原英朗が、両宮山古墳の測量は宇垣匡雅・大熊美穂が担当した。森山古墳出土遺物の実測・拓本を大熊が担当し、他の作業および本書の執筆は宇垣が担当した。
- 5 森山古墳の墳丘図は平成 6 年 5 月 14 日から 29 日までの間、6 日にわたって実施した測量の成果である。測量は塩見真康・岩崎良子が、森 宏之氏・大谷博志氏・若松舉史氏の協力を得て実施した。
また、両宮山古墳・森山古墳の墳丘外部分は岡山県史編纂室 1986 「付図 3 両宮山古墳群」『岡山県史 第 18 卷考古資料』岡山県による。
- 6 両宮山古墳の調査については下記の第二次山陽町遺跡整備委員会の委員各位から有益な御指導と御助言をいただいた。記して感謝の意を表したい。

則武忠直(山陽町文化財保護委員会委員長)　岡本明郎(日本考古学協会会員)
伊藤 異(岡山県古代吉備文化財センター第二課長)　狩野 久(元岡山大学教授)
亀田修一(岡山理科大学教授)　葛原克人(ノートルダム清心女子大学教授)
近藤義郎(岡山大学名誉教授)　中村 一(京都造形芸術大学客員教授)
- 7 出土遺物・実測図・写真等は山陽町教育委員会で保管している。

目 次

序

例言

目次

第1章 森山古墳の調査.....	1
第1節 調査の経緯と周辺の遺跡.....	1
1 調査の経緯.....	1
2 周辺の遺跡.....	1
第2節 調査の概要.....	5
1 遺構.....	5
2 出土遺物.....	5
3 遺物の年代と墳丘.....	11
第3節 調査の成果.....	12
第2章 両宮山古墳の墳丘測量調査.....	13
第1節 調査の経緯と墳丘.....	13
1 調査の経緯.....	13
2 墳丘の現状.....	13
第2節 墳丘の規模と形状.....	14
第3節 墳形の復元と評価.....	17
報告書抄録	

図 目 次

図1 古墳の位置.....	2
図2 主要遺跡の分布(1/40,000).....	2
図3 両宮山古墳周辺の遺跡・古墳(1/10,000).....	3
図4 森山古墳墳丘測量図(1/1,000).....	6
図5 墳丘断面(1/400) 挖削部分断面(1/400).....	7
図6 周濠・周堤断面(1/80) (南壁反転)	7
図7 墓輪(1)(1/4).....	8
図8 墓輪(2)(1/4).....	9
図9 墓輪(3)・須恵器(1/4).....	10
図10 森山古墳(1/1,500).....	11
図11 兩塗古墳出土墓輪(1/4).....	12
図12 両宮山古墳群(1/2,200).....	15
図13 両宮山古墳墳丘(1/1,000).....	16
図14 墳形の比較	18

図版目次

- 卷頭図版 1 両宮山古墳と森山古墳
- 卷頭図版 2 両宮山古墳
- 図版 1 1 両宮山古墳群
- 図版 2 2 両宮山古墳と森山古墳（北から）
3 森山古墳（西から）
- 図版 3 4 森山古墳墳丘（裾部北半に掘削部）（北西から）
5 トレンチ（西から）
6 周濠（西から）
- 図版 4 7 莢石（西から）
8 莢石（西から）
9 莢石
10 周濠と周堤（東から）

第1章 森山古墳の調査

第1節 調査経過と周辺の遺跡

1 調査の経緯と経過

本報告は1974(昭和49)年に実施した森山古墳周濠・周堤確認調査の報告である。調査は神原英朗が担当した。

森山古墳は両宮山古墳の前方部前面に所在する大形の帆立貝形古墳で、山陽町穗崎832他に所在する。現況で墳丘全長82m、後円部径55m、同高さ10.8m、前方部高さ2mを測る。墳丘の全域は畑として利用されていたが、現在は耕作されていない部分も少なくない。後円部には現状で2段、部分的には3段の平坦面(畾)が見られる。

墳丘の周囲は水田であるが、墳丘形状とほぼ相似形で盾形に近い平面の地割りを見せる。この地割りは付近の水田よりも一段高く北東側では54cm、南側では2.2mの段差をもつ。ほぼ平坦で、南北の長さ143m、東西幅117mを測る。後円部北西側と東側ではこの地割りと墳端の間に同形の畦畔線が見られるが(図4)、調査前までは墳丘の西側部分にも同様の畦畔線が残っていた(図版1)。

この墳丘をとりまく地割りと畦畔線は、いわゆる周庭帯、具体的には周堤と周濠の跡と見られ、墳丘と広大な外域施設が良好に保存された古墳として注目されてきた。

1974(昭和49)年は1969(44)年以来継続して実施してきた山陽団地埋蔵文化財発掘調査の6ヶ年目、現地での調査の最終年度であった。団地の造成工事も始まり、工事工程と調査の摺り合わせも厳しさを増すなか、用木山古墳群7・15・16号墳、新宅山遺跡などの調査を継続中であった。

8月、森山古墳西側に建設された山陽町児童館の運動場造成工事が計画され、周庭帯西部に大規模な掘削が開始された。ただちに工事の中止を申し入れたが、掘削は東西19m、南北29mに及んでおり、とりわけ北東の東西15m、南北18mの範囲は、地表面から最大で1.2m、平均1mの深さまで損壊を被っていた。

周庭帯の性格を明らかにし保存協議の基礎資料を得るために、8月24日～29日までの6日間にわたってこの部分の確認調査を実施した。調査は掘削最深部の南側に幅1m、東西26.6mのトレンチを設定して行った。調査の結果、以下に示す周濠と周堤の情報を得ることができた。これを開発部局に提示して協議し、これ以上の掘削は中止し構造物は作らず、広場としてこの場所が利用されることとなつた。

(神原・宇垣)

2 周辺の遺跡

山陽町は中央を南北に砂川が貫流し、これにそって形成された沖積平地を200～300mの山々が囲む盆地状の地形をなす。砂川中流域のこの盆地状の平野は山陽町から北の赤坂町南部に達し、東西5.5km、南北6.3kmを測る。南には瀬戸戸町西部の盆地状平地が、また、南西には龍ノ口山塊を隔てて旭川下流東岸平野が広がる。

山陽町域に形成された遺跡のうち、古い段階のものとして縄文時代晚期の南方前池遺跡がある。統

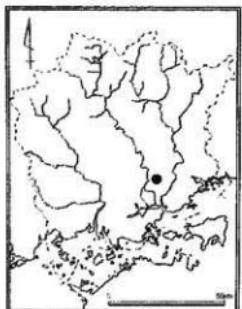


図1 古墳の位置

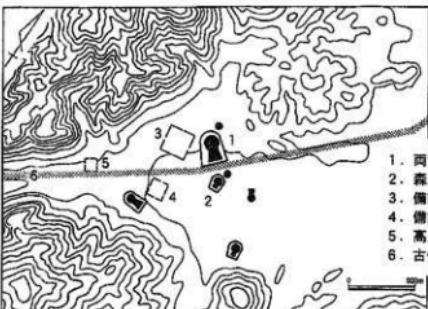


図2 主要遺跡の分布(1/40,000)

く弥生時代の遺跡は町内各所に分布が知られるが、とりわけ用木山遺跡を中心とする東高月丘陵に形成された中期後半の集落遺跡群は、遺構密度・遺物量ともに卓越しており、備前地域の拠点集落の一つと見ることができる。

古墳時代前期には東高月丘陵に用木1号墳(円・31m)、3号墳(前方後円・40m)と続く首長墳の系譜が形成される。3号墳以降も古墳は継続して築かれるが、墳丘規模は15m前後に縮小しており首長墳としての系譜は3期前後に一度途絶えるとみられる。このほか、現状保存のなされた同丘陵の野山古墳群、また、平野の東部、中島・斎富の齊戸池東古墳群なども前～中期の古墳群の可能性が強く、中小規模の方・円墳で構成される古墳群が東高月丘陵を含む町内の丘陵に散在しているとみられ、小首長あるいは有力家長の墳墓が各所に形成されていくと判断される。

6期(5世紀中葉)には同じ東高月丘陵内ではあるが用木古墳群とは位置をたがえて岩田3号墳が築造される。21mの方墳であるが2段築成で葺石をもっており、通常の中小墳よりも卓越を示す。

続く7期(5世紀後半)にこの地域の古墳の様相は大きな転機をむかえる。両宮山古墳の築造である。両宮山古墳については次章において詳しく検討を行っているので、ここでは簡単に述べる。墳丘全長194mを測る巨大な前方後円墳で、後円部径99m、同高さ20.6m、前方部長さ100mを測り、発達した前方部をその特徴とする。周囲には周濠・周堤が遺存する。周濠のうち北部は埋没して水田として利用されているが、残りの全周の約7割の部分は溜池として利用されており、畿内の巨大古墳とほぼ同様の景観を呈する。周囲には幅25m前後の周堤がめぐっており、現在畑や果樹園として利用されている。なお、平成14・15年度実施の確認調査によって周堤外側に外濠の存在が確認され、現在調査を継続中である。

両宮山古墳は吉備の三大巨墳の一つであり、墳形の特徴から3基のうち最も後出すると判断できる。先行する2者、造山古墳と作山古墳が岡山市西部、総社市と、備中に所在するのに対し両宮山古墳はそれから遠く離れた備前であり、備中地域勢力と備前地域勢力の交代を見ることも可能であろう。

両宮山古墳の周囲には中規模の古墳数基が築かれている。後円部北側に所在する和田茶臼山古墳は現況は径30mの円墳であるが、本来は全長約50mの帆立貝形古墳であったとみられる。また、周堤東隅の南東側には削平古墳で円墳か帆立貝古墳か不明であるが、径約25mの正免東古墳が所在する。その西側、両宮山古墳の前方部前面、主軸線のほぼ延長上に所在するのがここで示す森山古墳(帆立

貝形古墳・82m)である。なお、森山古墳の西側、両宮山古墳周堤南隅に近い高月幼稚園西側の水田において埴輪片を探集しており、この部分にも削平古墳が所在する可能性がある。

したがって、両宮山古墳には少なくとも3基の帆立貝形古墳・円墳が随伴するわけであるが、主墳である両宮山古墳と和田茶臼山古墳の2基は葺石と埴輪を伴わず、前方部前面の2基は葺石・埴輪を伴う。

両宮山古墳の後、8期(5世紀末)には首長墳の築造位置は両宮山古墳から平野を隔てた南側の山麓に移り、竜山石製長持形石棺を使用する朱千駄古墳(前方後円・85m)、続いて小山古墳(帆立貝形・54m)が築かれる。その後9期の前半に再び両宮山古墳近傍の小丘陵上に廻り山古墳(前方後円・47m)が築かれており、この古墳は両宮山古墳を意識した立地をとった可能性が考えられる。

廻り山古墳¹⁰は9期の古墳としては大形と言えるが、二塚1号墳(前方後円・37m)を嚆矢として8期に砂川中流域北部・赤坂町南部の首長墓系譜の築造が始まり、沼田内古墳(前方後円・26m)を経て10期の早い段階には該期最大の鳥取上高塚古墳(前方後円・67m)の築造がなされる。また、9期後半から10期前半にかけて山陽町斎富の斎富2号墳(前方後円・24m)、東高月丘陵の便木山7号墳



図3 両宮山古墳周辺の遺跡・古墳(1/10,000)

(帆立貝形・22m)など、それまで前方後円墳が築造されていなかった地域においてもその築造がなされるようになり、両宮山古墳周辺の卓越、一地域への前方後円墳の集中は9期前半をもって終了する。

なお、7期以降、首長墳とは別に中小規模の円墳の築造が活発になる。7期の四辻1号墳、8期とみられる別所古墳群、正崎2号墳などがその代表となる。いずれも10~20mの円墳であるが、高い墳丘盛土をもち、副葬品の構成も豊富であることが多い。今後詳細な分析が必要であるが、備前・吉井川下流域西岸地帯や備中・足守川西岸平野などにおける状況、小墳の群集とは異なる様相を呈している可能性が強い。

以上のように両宮山古墳とそれをとりまく中小の随伴古墳は5世紀後半における畿内中枢と吉備、また、吉備内部の政治的関係を考察する際の重要な資料である。一方、砂川中流域平野という小地域においては、該期のみならず以降の古墳築造にも少くない影響を与えた古墳と古墳群と考えてよいだろう。

古墳時代以降の遺跡の動向は両宮山古墳群の評価には直接関わらないとはいえる、築造の背景をさぐる重要な手がかりを与えてくれる。

奈良時代には両宮山古墳の西側に備前国分寺、その南側に備前国分尼寺の造営がなされる。また、両宮山古墳の西1.1km、砂川中流域盆地と旭川が形成した沖積平野との境界をなす低い鞍部には古代山陽道高月駅家推定地が所在する。古代山陽道は両宮山古墳と森山古墳の間、県道岡山吉井線とほぼ重複して東西方向に通過していた可能性が強く、国府から離れて立地する備前国分寺も、この古代山陽道との関係においてこの地に立地したとみられ、この地域が古代陸路の枢要の地であったことを示している。

中世の遺跡については概括が困難であるが、山陽自動車道建設に伴う馬屋遺跡の調査では集落や墓が検出されている。この遺跡を含め、丘陵端部の各所に集落が形成されたとみてよいだろう。中世末には両宮山古墳上に松田氏の部将、和田伊織が城を構えたとされるが、第2章で述べるようにその痕跡は確認できず、付会の可能性もある。

註

- (1) 水山卯三郎 1930『岡山縣通史』、および荒木誠一 1940『改修赤磐郡史』の記載においては森山古墳が「廻り山古墳」、廻り山古墳が「森山古墳」と呼ばれている。混乱の原因は両古墳とも字名が同じ廻り山であるためで、上記の呼称が正しい可能性もある。梅原末治氏が西もり山と呼んだのも字名が同じであることを考慮したためかもしれない。ここでは從前からの名称を用いる。

参考文献

- 足利健亮 1992『山陽・山陰・南海三道と土地計画』『新版 古代の日本』4中国・四国 角川書店
亀山行雄 1993『朱千駄古墳』岡山県埋蔵文化財報告 23 岡山県教育委員会
神原英朗 1971~1977『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』
第1集・第2集・第4集 山陽町教育委員会
近藤義郎ほか 1995『南方前池遺跡』山陽町教育委員会
横山 定ほか 1995『馬屋遺跡ほか』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 99 岡山県教育委員会

第2節 調査の概要

トレンチの東部で後円部墳丘と葺石、中央で周濠、西部で周堤を検出し、前記の「周庭帯」が周濠と周堤の跡であることを確認した。

森山古墳後円部は現在南北にやや長い楕円形を呈しており、墳端が削られていることが予想されたが、トレンチ東端から3.3mの位置において葺石を検出し、墳丘が約4m削り込まれていることが判明し、また、墳端構造が明らかになった。

1. 遺構

葺石の残存部は高さ95cmを測り、長さ20~30cmの角礫が石垣状に配置される。最下段には大形の石材が用いられる。注目されるのは葺石面が急角度をなすことで、約60°で立ち上がる。これは後円部径63mに対し高さ12.1mと、墳丘がきわめて高いことに関連するとみられる。なお、周濠底、葺石の前面には1.2mにわたって崩落した葺石の散布が見られる。

墳丘は断ち割っていないため盛土、地山は不明である。後述のように周濠埋土中からは埴輪片に混じって量は少ないが弥生時代後期前葉の土器片、サスカイト剥片などが出土しており、該期の遺跡が所在する微高地に古墳が築造された可能性がある。

周濠は上面幅14.1m、底面幅12.4mを測る。底面はほぼ平坦であるが墳丘側が深くなっている、周堤側と墳丘側の底面の差は40cmである。したがって、周濠の深さは現周堤上面を基準とすれば、墳丘側で120cm、周堤側で80cmとなる。

周濠埋土の最下層は黒色の粘土で、これが初期の堆積土とみられ、他の下層堆積も粘土である。中層は砂礫層である。両宮山古墳外濠、和田茶臼山古墳内濠においても礫を多く含む堆積層を断面中層~上層で検出しており、その年代を参考にすれば砂礫層は中世後半の堆積の可能性が考えられる。また、周濠断面の中央付近には長さ1.4m、深さ60cmにわたって25cm前後の角礫の集中が見られるが、その性格は不明である。あるいは中世等の遺構かもしれない。

周濠埋土から出土した遺物は埴輪片である。他に土師質高台付椀、瓦質・土師質鍋の脚、東幡系こね鉢、備前焼など中世の遺物の小片が少量含まれており、これらは中層ないし上層の遺物とみられる。

周堤の規模に関しては、西の裾部が調査区外であるため、現況の端部を起点とせざるをえない。基底部幅14.6m、上面幅12.7m、高さ80cmを測る。

周堤外端の位置が確定できないが、それが現況とほぼ等しいとするなら、周堤の基底部幅と周濠上面幅がほぼ等しい設計であったと考えることができる。

なお、この古墳が二重の周濠をもつかどうかは不明とせざるをえない。周辺の古墳すべてが二重周濠であり、今後の確認が待たれるところである。

2. 出土遺物

周濠埋土中からはコンテナ5箱の埴輪片が出土した。破片数は多いが、ここでは大形破片を中心にその主要なものを示した。埴輪は円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪からなる。

いずれも窯業焼成で、黒斑をもつ破片は認められない。赤褐色から暗灰色までと多様な色調を示す。

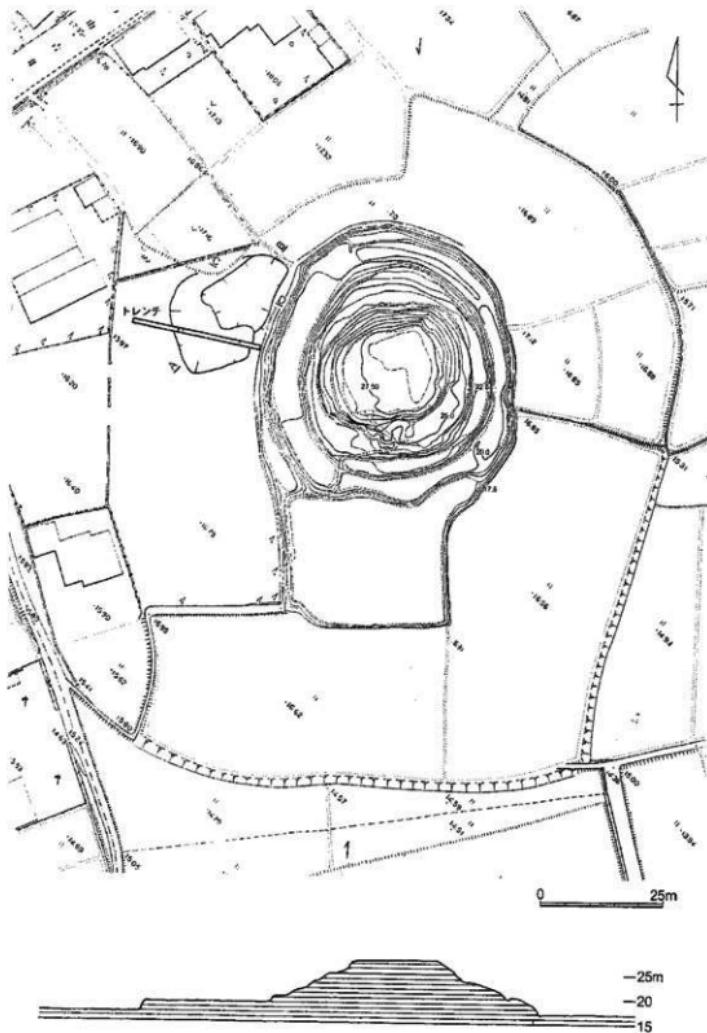


図4 森山古墳墳丘測量図(1/1,000)

胎土は砂粒がやや多いA(4~7・11・17・22・27・31)、細礫を含むB(3・8・9・10・12・14・23~25・33・36)、砂粒が少ないC(1・2・13・15・16・18~21・26・28~30・32)に大別しうるが、区分がむずかしい破片も少なくない。



图5 填丘断面(1/400)

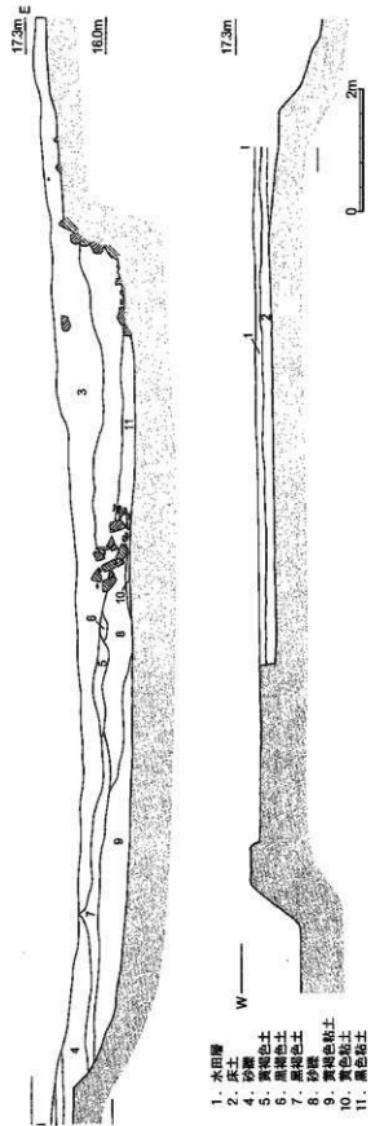


图6 周漾·周堤断面(1/80)(南壁反航)

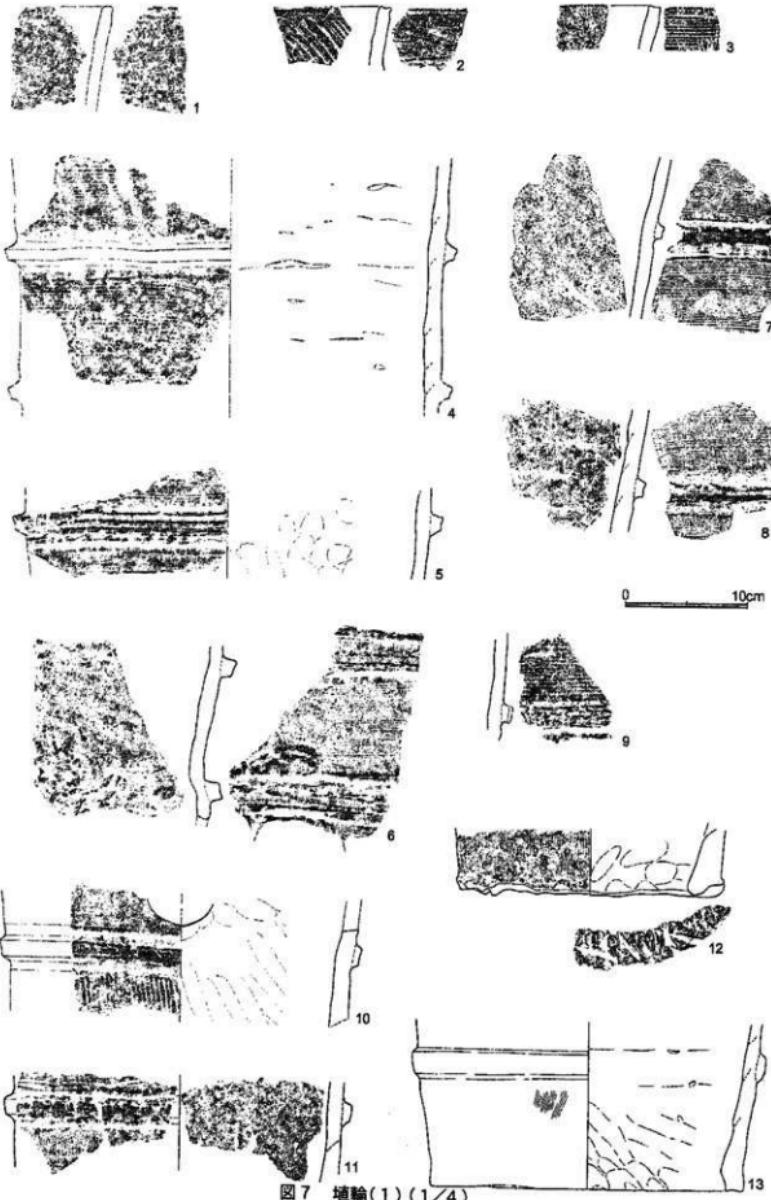


図7 墓輪(1)(1/4)

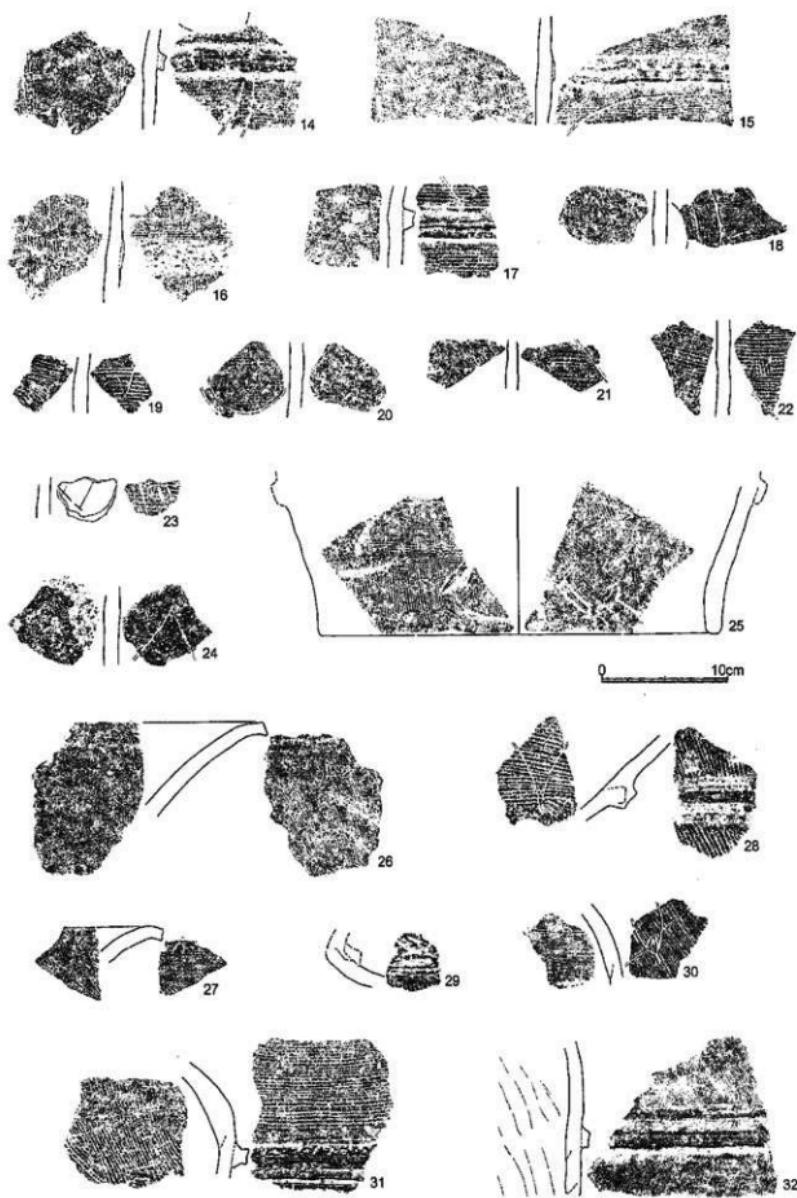


図8 塙輪(2)(1/4)

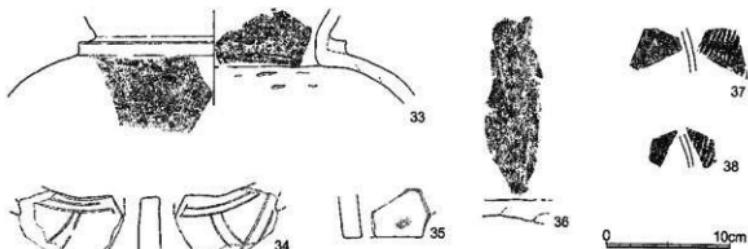


図9 墓輪(3)・須恵器(1/4)

円筒埴輪(1～25) 1～3に示すように円筒埴輪口縁部は断面方形で、薄くおさめる。

突帯間隔は4が推定111mm、6で96mmを測る。他に固化していない破片で85mm前後とみられるものがある。透かし孔はすべて円形である。

基部を除く外面にはB d種ヨコハケが施される。工具の移動間隔は56～35mmで、47mm前後が多い。基部は多くが一次調整のタテハケのみであるが、25のようにヨコハケを施す例もある。第1段突帯は端面に押圧を施す11と、押圧を施さない10とがある。13は表面の状態が良くないが押圧がなされているとみられる。なお、9、15、16のように、第2段以上の突帯で剥離しているものがある。9はその代表例として示したが、円筒部表面ではなく突帯の中ほどで剥離しており、粘土紐を二回に分けて貼り付けて突帯を形成したことを示している。他の古墳の資料ではこうした手法は確認しておらず、本墳に限ってのものかもしれない。

基部下端から第1段突帯上辺までの高さは107mm(13)～推定119mm(25)を測る。ひずみが大きいため基部径の計測はむずかしい。ひずみが小さく破片に長さがある10の第1段突帯上側での径28.3cm、11の26.5cmから判断して25cm前後と推定される。基部下端面には枝ないし草等の圧痕をもつものがある。

内面調整はナデを基本としており、口縁部付近はヨコないしナナメのハケとなる。

5と6は同一個体とみられる破片である。6は乾燥前に透かし孔に指をかけて移動したようで、透かし孔の稜が丸くなりそこから上側が大きくゆがんでいる。

朝顔形埴輪(26～33) 頸部、口縁部の破片がある。頸部下端、口縁部中段が剥離した破片29では上方への粘土紐の積み上げに先立って工具の先端で連続した斜め方向の刻みを施す。

文様 ヘラ描きの文様が施された破片が多い。多くは外面であるが28のように内面の場合もある。総じて器壁の薄い破片が多く、埴輪の上部に描かれているとみられる。文様の形はV字形24・28、弧線14・15、透かし孔周囲の二重弧線18、円形20などがある。16は2本の沈線によって描かれるが、どのような形状になるのかよくわからない。23は拓本にも現れないきわめて細い線で幾何学的な図形が描かれている。

30は調査の際の出土資料ではなく表探資料であるが併せて掲載した。朝顔形埴輪肩部の破片で、外面に鹿の頭部が描かれる。簡略な表現の頭と大きな枝角が描かれている。

形象埴輪(34～36) 34はきぬがさの立ち飾り部で、2本の弧線で縁取り・施文がなされる。35は板状の小片である。表面の荒れが著しく明確ではないが、破片右側は弧状に切れ込むとみられ、こ

の所見が正しいとすれば家形埴輪基部の可能性が考えられる。以上の2点は赤色が強く円筒埴輪等の焼成とはやや異なる。36も板状の破片である。内面調整はナデであるが粘土紐の接合痕が顕著に残る。破片の上下も定かでないが、板状をなすこと、また、器壁が比較的薄いことから家形埴輪の破片の可能性を考える。

須恵器(37・38) 小形の壺の破片2片が出土している。胎土・色調ともよく似ており同一個体とみられる。外面は平行タタキの後、部分的にナデが加えられ、内面はナデ仕上げである。内外面、破面ともに灰色を呈する。

3. 遺物の年代と墳丘

以上に示した埴輪は5世紀後半～末の特徴を示す。出土の須恵器は胴部の小片であるため時期の限定が困難で、TK23型式前後という以上の判断はむずかしい。

本墳の埴輪の時期を考えるうえで参考となるのが朱千駄古墳の埴輪である。TK23型式の須恵器が採集され、土師ニサンザイ型の墳形をとるとみられる朱千駄古墳の埴輪(龜山1993)は、基部高9.5cm前後、第1段突堤上側径26.9cmで、森山古墳の埴輪よりもやや小さく、より新しい様相を示すと言って良い。また、備中の資料ではあるが、TK208型式の須恵器を伴う宿寺山古墳の埴輪は本墳の埴輪よりも基部高・径ともかなり大きい。したがって宿寺山古墳→森山古墳→朱千駄古墳という順となり、森山古墳の築造時期はTK208～23型式、おおむね集成編年7期末ごろとみられる。また、これをもって主墳の両宮山古墳の年代を考えれば、その築造は7期後半～末とみてよいだろう。

森山古墳の墳丘を示したのが図10である。十分な比較検討ができていないが、吉備の他の帆立貝形古墳との比較においては周堤・周濠とも格段に広い。墳丘が大きいため周堤・周濠の規模も大きくなるのは当然であるが、後円部復元径63mに対して周堤幅116mと、墳丘の1.8倍の広さをとっており、きわ

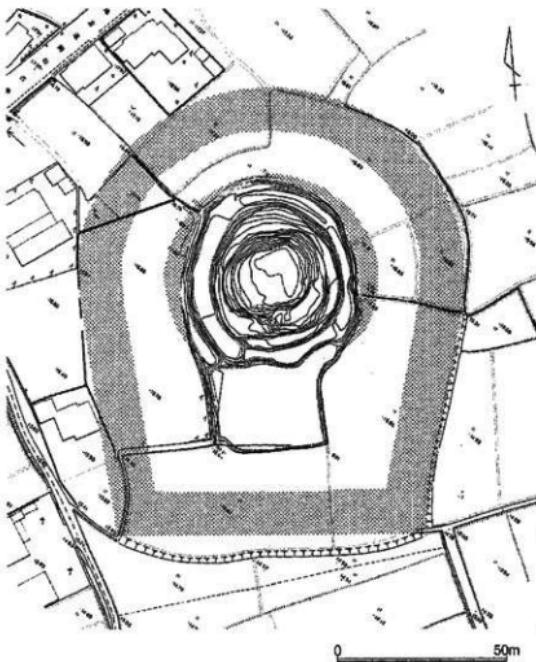


図10 森山古墳(1/1,500)

めて広い外域をもつと言える。なお、復元案では前方部前端、周堤の前方部側端部を短く考えたが、逆に前方部・周堤ともに削り込まれている可能性も否定はできない。

帆立貝形古墳は前方部が低いのが通例ではあるが、本墳の前方部の高さは2.4mと低い。周濠底面が前方部側に下降するかどうか不明ではあるが、トレーナーと同様に水田面下1.4mに前方部前端側の濠底を想定するなら、高さは約3.8mとなる。また、前方部および周堤南部分には明治～大正期に旧高月小学校が所在しており、その際にある程度削られたとすれば本来の高さは4m前後であったと推定される。

後円部の段築についても推定の域を出ないが、下段の平坦面が段築を大まかに反映しているとみられ、2段築成であった可能性を考えておく。

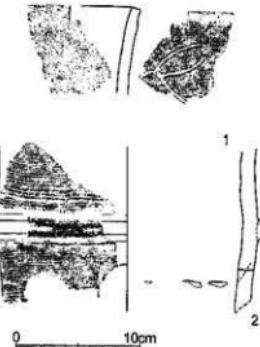


図11 両臺古墳出土埴輪(1/4)

第3節 調査の成果

調査によって、岡山県下最大の帆立貝形古墳である森山古墳の墳丘規模および構成要素の一端が明らかになったと言える。

墳丘全長は前方部前端を現況よりもやや内側に考えるため82mと変わらない。以下、数値を示せば後円部径63m、同高さ12.1m、前方部長さ22m、同幅24m、同高さ約4m、周濠幅14.1m、周堤上面および外側斜面の長さ13.4m、総長136m、総幅116mという数値を示すことができる。

本墳の墳丘を特徴付けるのは後円部の高さと周濠・周堤の広さと言ってよい。築造の年代は須恵器および埴輪から5世紀後半の新しい段階とみられる。

遺物のうち埴輪は上記のように時期判断の重要な手がかりとなるが、表採の鹿絵画破片も貴重な資料である。埴輪に鹿を描いた資料は岡山県下では倉敷市西の平古墳(新東ほか1974)、法伝山古墳(藤田ほか1974)で各1例、瀬戸町陣場山遺跡埴輪棺の3例(うち2例は1つの埴輪に2頭が描かれたもの)(矢部1985)、計5点が知られている。ここに6例めとして本墳の資料を示したが、これ以外に山陽町沼田所在の雨臺古墳から口縁部に鹿が描かれた円筒埴輪片(図11)が採集されているほか、森山古墳に隣接して所在する正免東古墳からも枝角をもつ鹿が描かれた埴輪片が出土している。以上の資料は川西編年IV期、集成6期から8期の資料であり、そのうち雨臺古墳が径や突帯の小ささから最も新しくなる可能性が考えられる。

これらのうち倉敷市の2例は造山古墳の周辺地域での分布であり、他の6例は瀬戸町と山陽町、すなわち両宮山古墳群の周辺地域での分布である。再三述べるように両宮山古墳に埴輪は伴わないが、時期的にも地域的にも信在を示す分布からすれば、巨大古墳の周辺に編成された埴輪工人集団に鹿を描画する儀礼が伝播し普及した可能性が考えられる。埴輪に描かれた鹿を概観(春成1999)した場合、胸部が2本の沈線で表現される例が少なくないが、岡山県下の諸例はすべて胸部を1本の沈線で表現していることや、法伝山古墳例と陣場山古墳の3例のうちの1つの表現がよく似ることなどはその裏付けになると考える。

第2章 両宮山古墳の墳丘測量調査

はじめに

山陽町穂崎⁽¹⁾に所在する両宮山古墳は墳丘全長190余mを測る大形の前方後円墳である。岡山市造山古墳(350 m)、総社市作山古墳(286 m)に統いて吉備の三大巨墳の一つに数えられる墳丘規模であり、備前最大というだけでなく5世紀後半の畿外における最大の古墳である。

周囲に和田茶臼山古墳、森山古墳の2基の古墳が随伴することが以前から知られていたが、1994年には径25 mの円ないし帆立貝形の正免東古墳が随伴することが明らかとなり、2003年度に実施した確認調査によって和田茶臼山古墳は帆立貝形古墳であり、両宮山古墳は2重周濠をもつとみられることが判明した。これらの調査成果は今後の報告に委ねることとし、ここでは2003年4~6月に実施した両宮山古墳墳丘測量の成果を示す。

第1節 調査の経緯と墳丘

1. 調査の経緯

両宮山古墳墳丘の計測は早く永山卯三郎氏によってなされ(永山1930)、その後、西川宏氏によつて計測値が示された(西川1975)。しかしながら墳丘測量図の作成はその巨大さのために1986年の岡山県史編纂事業を待つこととなり、それまでは墳形の検討には計測値と略測図が用いられた(春成1982)。また、墳丘に関わるものではないが、周堤に関しては調査が実施されている(河本1980)。

岡山県史編纂事業の一環として一部の樹木を伐採して航空測量が実施され、はじめて両宮山古墳の資料化がなされた(岡山県史編纂室1986)。これにもとづいて墳丘の築造企画もより詳細に論じられることとなり(石部・田中・堀田・宮川1991)、周堤の形状や陪塚の位置関係が明確になった意義は計り知れないが、鬱蒼とした灌木に覆われた墳丘の情報が十分に図化されたとは言い難く、後円部西半など現況と異なる部分も少なくない。

測量調査は墳丘図のそうした不備の修正を目的として実施した。墳丘が巨大であるため測点の密度は中小墳の場合にくらべて格段に粗いものとせざるをえなかつたが、それでも作業は2003年4月下旬から6月初めまでの2ヶ月近くを要することとなった。また、樹木の伐採・下草刈りの余裕がなかつたため、笹が密に茂る後円部墳頂付近などではかなり大まかな作図となつた。

測量においては墳丘東側に所在する山陽町設置の座標基準点を起点としたが、その結果、岡山県史墳丘測量図よりも基準高が34 cm高くなる。これは町座標基準点、県史航空測量基準点の設置が別の測量会社によってなされ、それぞれで高さの求め方が異なることに起因するようである。不都合ではあるが、これを用いる他に方法がなかつたため齟齬を生じたことを明記しておく。なお測量時の周濠水面は20.47 mである。

2. 墳丘の現状(図13)

現在、墳丘の全域は樹木に覆われ、後円部頂など墳丘の大部分は移動もままならないほど下草や笹

が密生している。

前方部前面中段付近には神社が、それに至る参道が前方部東側に設けられている。また、神社境内地上方の前方部頂近くにも掘削による平坦面がある。前方部前端西部には探土跡とみられる大規模な掘削部があるほか、前方部を中心に墳端部の崩落も著しい。北東側くびれ部上方は急な谷状をなしており、後円部と前方部の接続部が浸食されたとみられ、規模は小さいが同様の形状は南西のくびれ部においても見られる。後円部北斜面には果樹の畠があり階段状の掘削がなされている。その東側も山林となった畠跡である。前方部上面後円部寄りの平坦面、また、後円部西側に造成された大規模な平坦面も畠の跡とみられ、後円部頂を含め、かつては墳丘のかなりの部分が畠として利用されていたとみられる。また、後円部後端には県史測量図では造り出し状の突出部が表現されているが、この部分は畠として削り残された墳丘と推定され、長方形を呈し西にむかって徐々に低くなる。なお、後円部頂は畠となっていたとみられ、西に向かって高さを減じるが、比較的新しい時期の乱掘の痕跡と思われる浅い凹凸が認められる。

そうした土地利用の歴史を背負うため墳丘の遺存状態は必ずしも良好とは言いがたい。墳丘の北東半は総じて遺存状態が良くなく、前方部北東側に中段テラスが改変を受けながらも遺存するほかは段築がほぼ失われた状態にある。北東造り出しは規模が大きいため遺存するが、かなりの改変を受けている。前方部前面も総じて遺存状態は良くなく、段築は不明瞭となっている。

それに対して南西半部の遺存状態は比較的良好、前方部前面西部から前方部南西半にかけて3段の段築が遺存する。後円部南西部は畠の造成によって大きく掘削されているが、北側には中段テラスを残す。

なお、両宮山古墳は戦国時代に砦ないし城郭として利用されたと伝えられるが、そうした改変の痕跡は認められなかった。南西くびれ部側前方部上段に縱方向にはいる溝も、縦堀と推定されるものではない。

第2節 墳丘の規模と形状

3段築成の巨大古墳で、発達した前方部をもち両くびれ部の前方部側には造り出しを設ける。

墳丘主軸は座標北に対して西に44°振る。

下段テラスの位置は水面から2.5mの高さであり、墳端は水面下数mに推定される。

墳丘の各所、また渴水期の池の水際にも礫・埴輪片とともに認められず、葺石・埴輪を伴わないと判断する。

墳丘の残存全長は後円部後端の畠部分を含めて194mを測る。

後円部頂最高所41.32m(後円部頂の平均的な高さは41.10m)、前方部頂42.0mで、前方部の高さが後円部のそれを上回る。測量時水面からの高さは後円部20.6m、前方部21.5mである。墳丘が前方部側に下降する地形¹⁰に築かれているため前方部の墳端は後円部墳端よりも3m程度下降するとみられ、前方部の盛土高さは後円部のそれを大きくしのぐとみられる。

後円部

後円部の残存径99m、くびれ部幅73m、現状で後円部頂径24mである。後円部頂は西にのびた橿円形を呈するが、これは畠の造成によってやや変形しているためである。

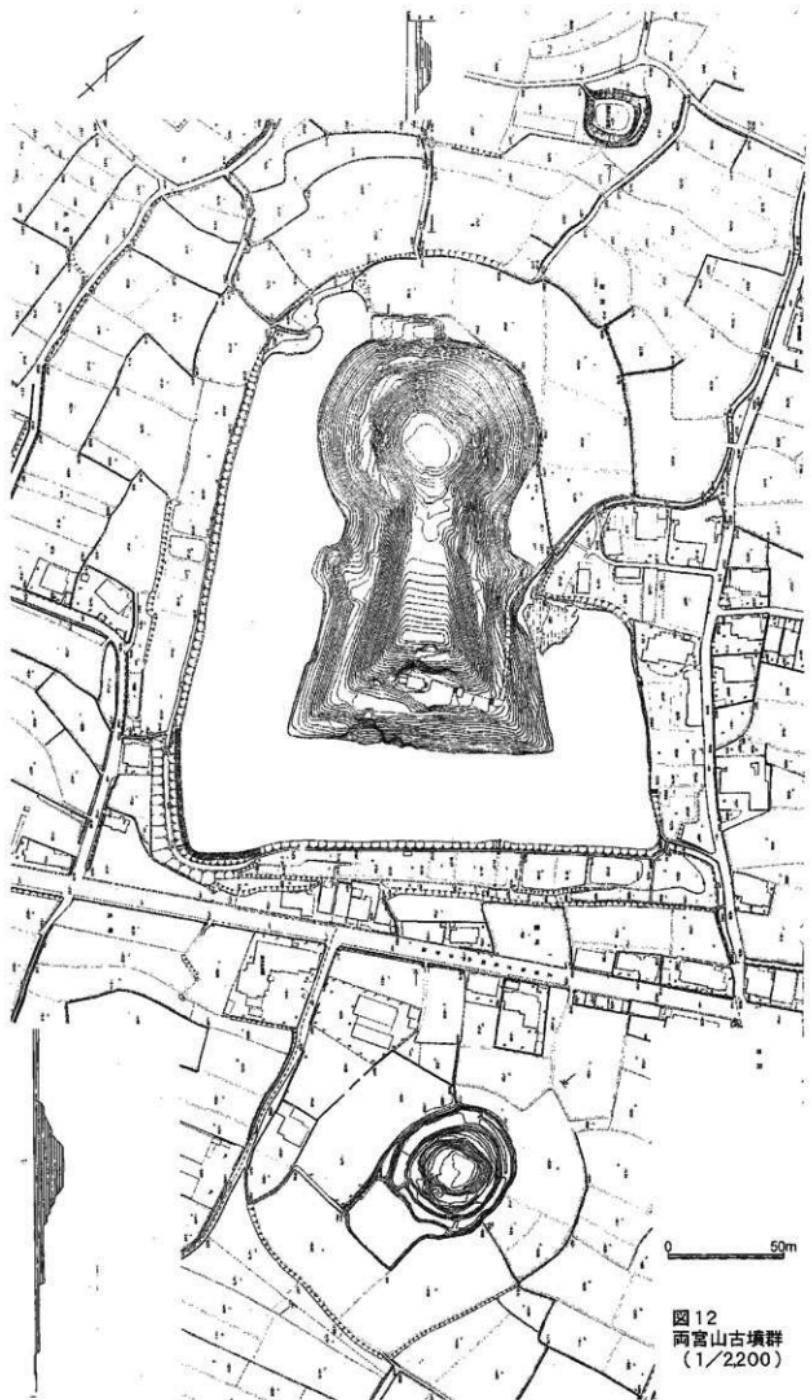


図12
両宮山古墳群
(1/2,200)

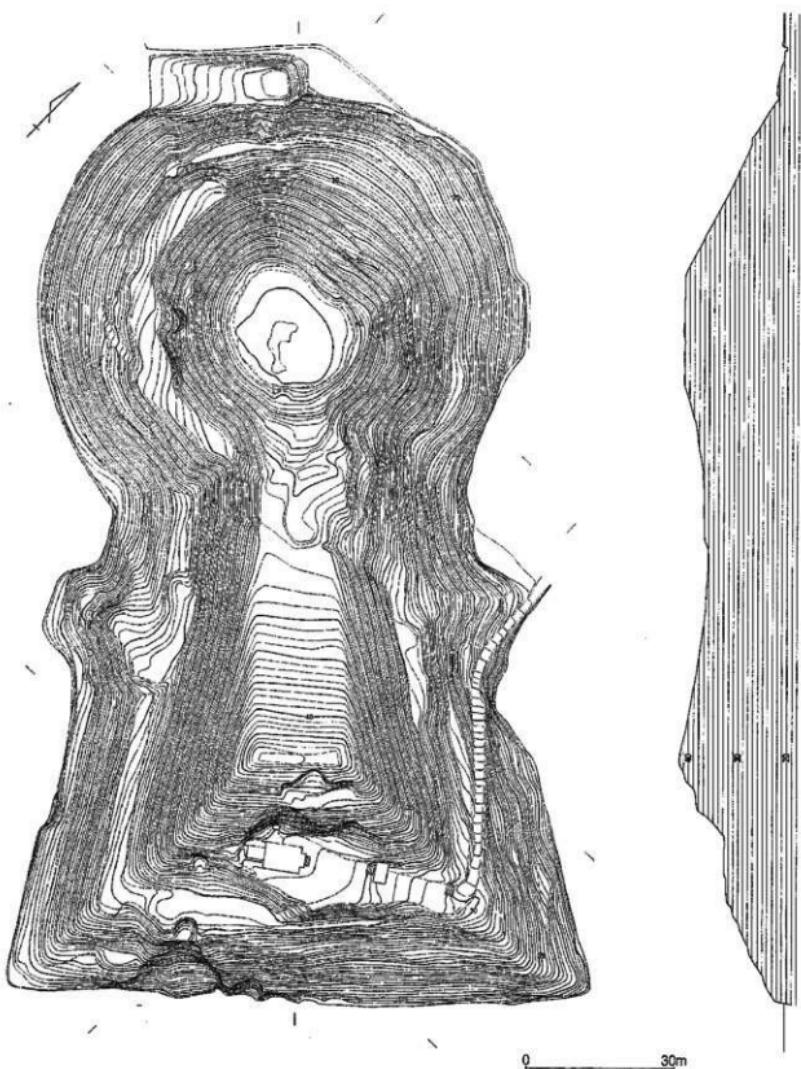


图13 両宮山古墳墳丘(1/1,000)

下段テラスは南西くびれ部付近(23.0 m)にのみ残り、その部分で幅 2.7 m、くびれ部で 5.5 m を測る。西の斜面部では上方の烟の開墾の土砂によって埋没、不明瞭になっているよう、部分的にそれをうかがわせる傾斜変換が認められるにすぎない。中段テラスは後円部北側(28.0 m)にのみ遺存しており、最も遺存状態の良い部分で幅 3.0 m を測る。

前方部

前方部長さは 100 m、前面幅 117 m である。

前方部下段テラスは南西角から南西くびれ部にかけて(23.0 m) 遺存しほぼ水平である。幅は前方部前面側で 4.0 m、南西側面で 3.0 m を測る。

中段テラスは前方部前面中央付近から南西側面、南西くびれ部までの部分で遺存状態がよく、北東側面においても神社参道の上側 28.0 m 付近に遺存する。幅は前方部前面側で 5.5 m、南西側面で 3.5 m 前後を測る。また、前方部前面での高さ 30.03 m に対し、南西くびれ部での高さは 27.77 m であり、前端にむかって 2.3 m の上昇を示す。

前方部上面は広い斜面をなし、前端で幅 18 m を測る。烟の造成のためやや不明瞭となるものの、くびれ部上方付近から上昇に転じ、緩やかな斜面をなして後円部頂に接続するとみられる。

くびれ部

北東・南西両側に造り出しが設けられている。北東造り出しへは烟の造成や池の構築などのため形状がやや不明確となっているが、その大きさをうかがうことがなお可能である。南西造り出しへは北側が斜めに削られ瘤状に土が盛られてはいるが總じて保存状態が良い。南北の基部幅 22.5 m、墳端から前方部斜面に接する部分までの長さ 28.0 m を測る巨大なものである。水面からの高さ 8.4 m を測り、前方部上段の下部に接続しており、造り出し部で中段テラスは分断されることになる。また、下端では下段テラスが造り出しに平行してまわっており、この部分で幅 2.0 m を測る。造り出しが 2 段築成となっているわけで、他に例をみない特異な形態である。

段築の比率

中段が遺存する後円部後端付近では下段テラスの位置が不明であるが、やや西の 23.8 m 付近の傾斜変換部をその痕跡とみた場合、中段斜面の水平距離と上段斜面の水平距離、また上段、中段の高さの関係はともにおおむね 1 : 3 となる。

一方、前方部頂西側の前方部側面においては中段斜面部の水平距離 8.5 m、上段が 22 m、高さは中段が 5.5 m、上段 13.5 m であり、中段と上段の比は斜面部水平距離、高さとともにほぼ 1 : 2.5 となる。

第 3 節 墳形の復元と評価

測量の大きな成果は各段の位置を把握できたこともさることながら、前方部の形状を把握できたことにある。岡山県史測量図では樹木に影響されて前方部前面幅や長さなどが 5 m 前後大きく、より発達した前方部をもつかの印象を与える図になっていたことが判明した。

墳端の大部分が波によって浸食されている。また、斜面に築かれているため後円部中心点の移動を考慮する必要があり、墳形全体の復元は容易ではない。復元案として示したのが図 14 であり、本来の墳丘規模は全長 200 m、後円部径 113 m であったと推定して大過ないと考える。

本墳は発達した前方部の大きさから大阪府大仙古墳(486 m)の 2/5 規模墳の可能性が指摘されて

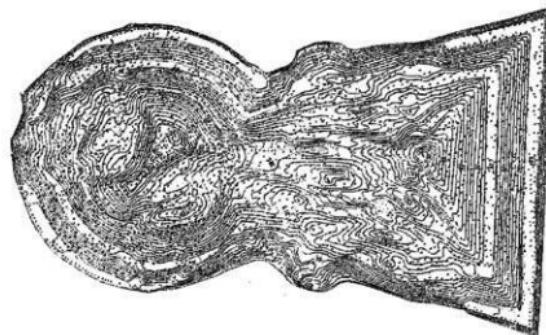
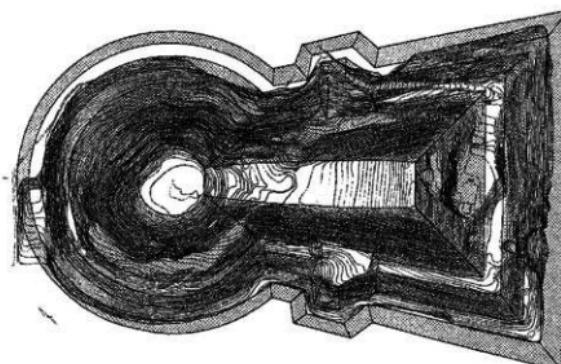
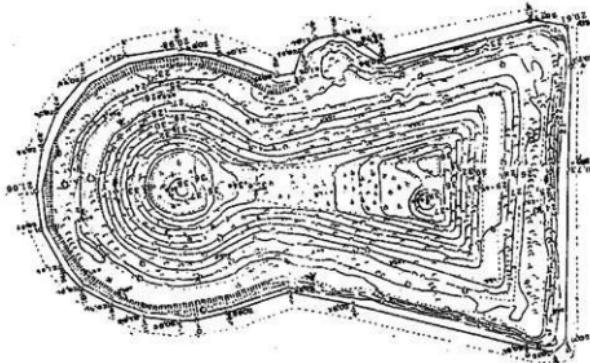
大阪府大仙古墳(1/4,500)(1/2,800×2/5)

30m

岡宮山古墳(1/2,800)

図14 墓形の比較

大阪府御廟山古墳(1/1,800)



きたが(岸本1992)、今回の測量によってそれが確実となったとみてよい。大仙古墳の相似墳として大阪府御廟山古墳(186m)、淡輪ニサンザイ(宇度墓)古墳(175~200m)、奈良県河合大塚山古墳(193m)などがある(岸本1992)。

それぞれの古墳の保存状態や墳丘測量図の精度が異なるため詳細な比較はむずかしいが、くびれ部の位置や前方部幅、テラスの幅などでそれぞれの古墳間に若干の相違が見られる。両宮山古墳の前方部テラスの位置や幅は大仙古墳のそれによく合致しており、築造企画のうち平面形は畿内中枢から伝達された可能性が考えられる一方、造り出しの形状は大きく異なっており、吉備において独自の改変がなされたと推定される。墳丘に畿内中枢との親縁関係と、地域の独自性がともに表示されていると言えよう。

また、大仙古墳および同規格の3古墳は7期に位置付けられるが、後述のように両宮山古墳もほぼこの時期の築造とみてよい。このうち淡輪ニサンザイ古墳は水没部分が大きいため墳丘規模が不明確かつ若干規模が小さいとみられるが、河合大塚山古墳は両宮山古墳と規模・形状とともによく一致し、御廟山古墳も墳頂の水没を考慮すれば両宮山古墳と同規模の可能性が強い。御廟山古墳は百舌鳥古墳群を構成する大形墳で、大王墳に次ぐ規模をもつ。また、河合大塚山古墳は畿内5大古墳群の一つ馬見古墳群の該期の盟主墳であり、淡輪ニサンザイ古墳は畿内5大古墳群に統く有力古墳群である淡輪古墳群を構成する大形墳である。

7期の有力古墳群における同規格・同規模の大形前方後円墳の築造は、それが畿内政権を構成する有力氏族に与えられた一定の格付けを表示するものであった可能性が考えられ、両宮山古墳も大王に次ぐ格付けの表象として築造されたと考える。

墳形以外に両宮山古墳の築造時期を考える手がかりはない。両宮山古墳主軸線の延長上に所在する大形の帆立貝形古墳・森山古墳の内容については前章に示したが、集成編年7期末ないし8期初めに位置付けられる。両墳の位置関係や帆立貝形古墳という墳形からすれば森山古墳は両宮山古墳に随伴し、両宮山古墳の後に築かれたとみられる。したがって、森山古墳の年代を下限とするなら、両宮山古墳の築造は集成編年7期の後半から末、5世紀後半とみられる。

なお、両宮山古墳北側の茶臼山古墳から森山古墳までを両宮山古墳群と呼ぶならば、その北側の2基、両宮山古墳・和田茶臼山古墳は葺石、埴輪を伴わず、南の2基、森山古墳・正免東古墳が葺石、埴輪を伴うという相違を示している。この差異がどのような意味をもつか今後の課題である。

以上、本書においては両宮山古墳群のうち両宮山古墳と森山古墳の資料を提示し若干の検討を行った。

両宮山古墳群のうち両宮山古墳外濠・和田茶臼山古墳に関しては平成15年度の確認調査によって多くのデータが得られており、ここに示した資料もそれらとの対比検討によってさらに詳細な評価が可能となると思われる。それについては今後改めて提示したい。

註

- (1) 墳丘に限ってであり、周堤は大字和田、馬屋に属する。
- (2) 周堤東隅付近で埴輪片が採集されているが、埴輪の散布は周堤全域にわたるものではない。池堤改修時に正免東古墳ないし森山古墳の埴輪が持ち込まれた可能性を考える。
- (3) 池の漏水時に墳裾部から弥生土器片が採集されており、弥生時代集落遺跡が所在する微高地の上に墳丘が

構築されているとみられる。

- (4) 西造り出しが高いのは城郭造成の際に改変とされるが(葛原・宇垣1991)、墳丘の形状と整合しており、また東造り出しもきわめて高いことが確実であり、本来の形状と考える。

文献

- 石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川渉 1991 「造山・作山および岡宮山古墳の築造企画の検討」『考古学研究』第38巻第3号 考古学研究会
- 岡山県史編纂室 1986 「付図3岡宮山古墳群」『岡山県史 第18巻考古資料』岡山県
- 岸本直文 1992 「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』第39巻第2号 考古学研究会
- 葛原克人・宇垣匪雅 1991 「岡宮山古墳」『前方後円墳集成 中国四国編』山川出版社
- 河本清 1980 「岡宮山古墳周堤確認調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告』10
- 新東晃一・伊藤晃・間壁慶子 1974 「西の平古墳」『倉敷考古館研究集報』第10号 倉敷考古館
- 永山卯三郎 1930 「第1編 上古」『岡山県通史』上編
- 西川宏 1975 「吉備の首長」『吉備の國』学生社
- 春成秀爾 1982 「備前の大形古墳の再検討」『古代を考える』31 古代を考える会
- 春成秀爾 1999 「埴輪の絵」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集
- 藤田憲司・間壁忠彦 1974 「法伝山古墳」『倉敷考古館研究集報』第10号 倉敷考古館
- 矢部秋夫 1985 「陣場山遺跡について」『瀬戸町史資料集』瀬戸町
- 図14出典
末永雅雄 1975 『古墳の航空大観』学生社



1. 両宮山古墳群

図版2



2. 兩宮山古墳と森山古墳(北から)



3. 森山古墳(西から)



4. 森山古墳墳丘(裾部北半に掘削部)(北西から)



5. トレンチ(西から)



6. 周濠(西から)

図版4



7. 葦石(西から)



8. 葦石(西から)



9. 葦石



10. 周濠と周堤(東から)

報告書抄録

ふりがな	もりやまこふん・りょうぐうざんこふん							
書名	森山古墳・両宮山古墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山陽町文化財調査報告							
シリーズ番号	2							
編著者名	宇垣匡雅							
編集・発行機関	山陽町教育委員会							
所在地	〒709-0816 岡山県赤磐郡山陽町下市 337 TEL 0869-55-0783							
発行年月日	2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もりやまこふん 森山古墳	おかやまこふんあかいわでん 岡山県赤磐郡 さんようちゅううばねき 山陽町穂崎 832 他	33322	234	34° 44' 06"	134° 00' 28"	1974.8.24 ~ 1974.8.29	27	遺跡破壊 保存資料収集
りょうぐうざんこふん 両宮山古墳	おかやまこふんさんくわいわでん 岡山県赤磐郡 さんようちゅううばねき 山陽町穂崎 790 他	33322	231	34° 44' 12"	134° 00' 19"	2003.4.11 ~ 2003.6.2	2000 (測量)	墳丘形状の検討
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
森山古墳	古墳	古墳時代	墳丘・葺石・周濠・周堤		埴輪・須恵器		岡山県下最大の帆立貝形古墳	
両宮山古墳	古墳	古墳時代	墳丘				全国第39位の巨大前方後円墳	

正誤訂正（山陽町文化財調査報告2）

12頁 誤 図11 雨壺古墳出土埴輪(1/4)

正 図11 雨壺古墳出土埴輪(1/4)

